

## 中国の犁の起源・形態とその分布

尹 紹 亭

犁は農具のなかでも重要なもので、畜力牽引による犁耕は、伝統的な農耕技術発展の最高水準を示すものである。国内外の犁に関する研究成果ははなはだ多く、農具研究のなかでもっとも盛んな領域といっても過言ではなからう。我が国では早く春秋戦国時代に鉄製犁先を使った犁耕の記述が見られる。漢代は我が国の犁耕技術が大きな改良と普及を見た時期であり、史書に多くの記述が見られる<sup>1</sup>。唐代の陸龜蒙の『耒耜經』は我が国の農具に関する著作としてもっとも早いもので、江東犁に関して各部の名称と寸法、構造と機能について詳しく解説しており、我が国の犁に関するもっとも重要な文献である<sup>2</sup>。この後では宋代の樓璣の『耕織図』、元代の王禎『農書』などは、犁耕についての解説のみならず犁や犁耕の図を載せている。このように我が国の学者の犁に関する研究は、長い歴史をもっているのである。

現代の中国犁の研究も十分豊富である。『中国古代農業科技史図説』（農業出版社、1989）、『中国農業百科全書：農業歴史巻』（農業出版社、1989）、『中華農器図譜』（農業出版社、2001）、これらの書は大型の事典類で、我が国の犁の起源と発展および考古・歴史・民族学の著作と文献・図像資料についてかなり詳しく紹介している。『中国農史研究』『農業考古』等の雑誌には、これまで多くの犁に関する研究論文が発表されている。拙著の『雲南物質文化 農耕巻』（雲南教育出版社、1996：李淑訳『雲南農耕文化の起源 - 少数民族農耕具の研究 -』第一書房、1999）は、これまでの主として考古や歴史文献による研究方法を踏襲せず、フィールド調査に重点をおいて考察し、雲南省各地の犁と犁耕について詳細な資料を記録した。今回は以上述べた資料を基礎に、一歩進めて中国犁の起源、形態とその分布について考察することにした。

### 中国犁の起源

中国の農業史学界では、早期の農業は刀耕、鋤耕（日本的には鋤耕）、犁耕の3段階を経てきたと一般的に理解されている。いわゆる刀耕農業は、原始的な刀耕火種輪閑農業であり、刀耕の後は鋤耕、実際には耜耕であり、耜耕は脚踏みを経て人が引くようになり、方形の刃先は三角形に変化して犁となった。

これを材質面から見てみると、刀、鋤、犁はすべて石（木、骨）、銅、鉄の3つの段階を経ている。もっとも早期の刀は石斧、石刀であり、もっとも早期の耜は木耜、石耜、骨耜であり、もっとも早期の犁は石犁である。石斧・石刀は中国の石器時代の遺跡ではどこでも見つかっており、木耜・石耜・骨耜はすべての遺跡にあるわけではなく、河北省武安県磁山遺跡と河南省新鄭県裴李崗遺跡および遼寧、内モンゴなどの遺跡からは石耜が多く出土しており、その年代のもっとも古いものは8,000年前に達する。浙江省余姚県河姆渡遺跡、河羅家角遺跡からは木耜と大量の骨耜が出土しており、年代は7,000年前前後である。

もっとも早い犁は石犁で、浙江省呉興邱城の新石器時代の遺跡からは、かつて5,000年前の三角形の石犁が出土している<sup>3</sup>。この40年来、このような扁平で二等辺三角形で刃が左右両辺に付くタイプは、浙江省一帯で相次いで発見されており、いまや100例を下らない。この外にも河南省でもかつて新石器時代の石犁が発見されている<sup>4</sup>。石犁の大量出土は、中国犁の起源が江南と華北地方一帯にあることを信じさせるに十分である<sup>5</sup>。しかしながら出土するのは石製犁先のみで犁体は出土しておらず、そのため当時の犁の全体像については知ることができないが、ただ耒と耜の結合あるいはその発展であろうと推定することができる。

石犁の後には銅犁が出現する<sup>6</sup>。中国の青銅の鑄造は夏代に始まるが、夏・商（殷）・周時代にはかえって青銅鑄造犁先の使用は少なくなっている。その原因は明らかで、この時代は鼎のような礼楽の祭器の製造が青銅資源の圧倒的部分を占めていたからに違いない。これまで発掘された青銅犁先は、江西省新于県大洋洲商代の墓より出土したわずか2件のみである。この犁先の上面には紋飾が鑄出されていることからして、青銅犁先は実用犁先なのか祭器なのか、考証を要するところである<sup>7</sup>。春秋戦国時代にいたって鉄製犁先が生まれ、石から鉄への犁先の進化はゴールを迎えた。

日本の学者、家永泰光の『犁と農耕の文化』<sup>8</sup>は、犁の起源を論じるにあたって、E. ヴェルトの学説を紹介している。ヴェルトは犁耕の起源をインド西北部にあると考え、そこを第1次センターと呼んでいる。その後犁耕は東・西・南各方面に伝播し、その後また3つの第2次センターを形成した。1つは中国、第2は地中海、3つ目は北アフリカである。このヴェルトの学説に依るなら、中国の最初の犁はインドから伝来したことになる。ところがすでに述べたように、中国では8,000年前に多くの地方で石耜や骨耜が使われており、5,000年前には石犁が使われている。金属器時代に入ればまず青銅犁先があり、その後鉄製犁先の全面使用に移行する。このことから見れば、中国における犁の起源と発展の筋道はかなり明快であり、それに対してヴェルトの犁耕はインドに起こって中国に伝播したという仮説は、何らの証拠もない。別の面からいえば後に述べるように中国の犁耕起源地方の犁型とインドの犁型とはまったく別系統である。以上の事実は中国の犁耕の起源は華北と江南地方にあり、インド起源東方伝播説は、ただの憶説にすぎないことは明らかであろう。

犁の起源を探るにあたっては、牽引動力の問題は避けて通れない。新石器時代の遺跡からは、いまだ何らかの畜力で引いた証左は見つかっていない。このことから初期の石犁は人力で引いたと考えられる。実際、貴州省・内モンゴ・甘粛省・陝西省一帯では、いまも人力で犁を引く光景を見かけることができる。家畜に引かせることのできない状況下では、人に引かせて耕作するのは自然ななりゆきといえよう。中国で耕作に牛を使うのは春秋時代からであり、戦国時代には牛耕は普及しはじめた。牛以外では馬が見られるが、雲南省ではかつて羊も使用されていた<sup>9</sup>。雲南省ではいまだ新石器時代の石犁は発見されていないが、大理洱源西山一帯では、古代にはかつて石犁が使われていた。ただこれは牛や人に引かせたのではなく羊のようで、「山羊が石犁を引く」と呼ばれている。檀萃『滇海虞衡志』には、「雲南には羊が多く、羊を飼って耕作している」と記載されている。「羊耕」の事例は、雲南以外ではいまだ聞いたことがない。

雲南省以外では、かつて「象耕」があった。『唐書』「南蛮伝」には、雲南から西南は「乗象の国」としている。『蛮書』巻4所載の雲南から西南の「茫蛮部落」は、「象の大きさは水牛ぐらい」で、「人々は象を飼って耕作している」と記載されている。「養象耕田」の意味が十分理解できない学者は、この記事を疑って「養牛耕田」の誤りであろうとするが、実はそうではない。先に述べたように、雲南では「養羊耕作」の習俗があった。それならどうして「養象耕田」ができないのであろうか。しかも「象耕」は象に犁を引かせるとは限らず、象の足で踏ませることもあり得るのである。「象耕」に関しては、『越絶書』に「舜は蒼梧に葬り、象が耕す。禹は会稽に葬り、鳥が草取りをする」と書かれている。王充『論衡』「書虚」は、この記事を解釈して「実は蒼梧は象の多い地方であり、会稽は鳥の集まる場所である……象は自然と土を踏み、鳥は草むらをついばむ。すると土は踏まれてくつがえり草はなくなり、耕された状態となる」と述べている。「象は自然と土を踏む」という解釈は非常に明快であり、それはまさに「踏耕」である。筆者は西双版纳<sup>シーサンパンナ</sup>を調査したとき、タイ族がかつて象を使って田を踏ませ、泥を細かくする方法について聞き取りをしたことがあり、これは「踏耕」の1

証左である。1996年、筆者は南寧の広西壮族自治区博物館を見学したとき、意外にも牛の群れで踏耕している写真を目の当たりにして、踏耕の存在は疑いないと確信した。幸いなことに1998年、筆者は紅河調査のおり紅河沿いのタイ族の水田地帯で、永年探し求めていた牛の群れの踏耕の現場をこの目で見る事ができた。この発見によって、いわゆる「象耕」と雲南ではかつて踏耕があったかどうかという2つの課題が一気に氷解した。

踏耕は犁耕とは異なる別種の泥土を細かくする方法ともいえるが、実際民間の土を「耕作」する方法は様々である。たとえば怒江のリス族は、早地に播種する前に少量のトウモロコシの粒を地中に撒き、豚の群れを入れ放つ。すると豚はトウモロコシを探して食べようと土を掘り返すので土壌は起こされて柔らかくなる。ある程度「耕」的効果が得られると、穀物を播種する<sup>10</sup>。このほか刀耕火種の農業については、刀耕とは実際は火耕＝焼畑であり、土を焼くことは雑草や害虫を焼き殺すのみではなく、土地の肥力を向上させ、かつ土壌を柔らかくすることができる。以上にあげた象と牛の踏耕や、「羊耕」「猪耕」（日本的には“豚耕”）「火耕」は、すべて伝統的な耕作方式であり、それと犁耕の起源がどう関係するのか。これらは犁耕出現前の原始的耕作形態なのかどうか。これらは考慮すべき課題であるが、回答の難しい課題でもある。

## 中国犁の形態分類と分布

歴史資料と筆者のフィールド調査を総合して整理をすれば、中国の犁は大きくは大四角枠曲轆犁、無犁柱長轆犁、四角枠長直轆犁、三角枠長直轆犁、三角枠曲轆犁の5種類に分類できる。以下、タイプ別に構造と分布を紹介したい。

### 1. 大四角枠曲轆犁

大四角枠曲轆犁は「江東犁」とも呼ばれる。歴史家は唐代の陸龜蒙『耒耜經』に詳しく記載された犁型（その分布が長江中下流域なので、研究者に「江東犁」と呼ばれている）は、中国犁がすでに完全に定型化した指標と考えている。しかしながらこの犁型は長江流域に分布する1犁型にすぎず、中国国内のあらゆる犁型の代表ではない。その形は一木の犁身ではなく犁床（犁底）と犁柄は別材で生まれ、犁柄は短く犁床は大変長く、犁轆は短くて湾曲し、犁柄・犁床・犁轆・犁柱は大きな四角枠を構成し、大きな犁先と犁へらを装着している。この犁型は地形が平坦で土壌が厚い水田の耕作に適している。



図1 敦煌莫高窟第445窟壁画（唐代）



写真1 雲南省昆明市呈貢県 漢族の大四角枠曲轆犁

### 2. 無犁柱長轆犁

この犁型のもっとも大きな特徴は、犁柱が無く、そのため枠構造をもたず、犁身は多くは幅広の板状で、そこに犁轆を装着して犁へらの撥土機能を兼ねている。耕作土壌が痩せて薄く石の多い乾燥地に適してい

て、我が国西部の北は甘肅省から南は雲南省西北の甘青高原地区に分布している。



図2 敦煌莫高窟第146窟壁画(五代)



写真2 雲南省徳欽県 チベット族の無犁柱長轆犁

### 3. 四角枠長直轆犁

この犁型もまた我が国西北地方の1つの重要な犁型である。その特徴は比較的長い犁床をもち、犁身と犁床は同一の部材でできている。犁身・犁床・犁轆・犁柱は四角枠を構成し、大きな三角形の犁先と大きな犁へらを備えている。耕深を調節する犁評があり、犁轆は長くかつ真っ直ぐで、二頭引きの二牛抬杠式である。多くは旱地の耕作に使われ、水田を鋤くのものにも使われる。



図3 陝西省綏徳県 漢代墓画像石



写真3 雲南省迪慶州中甸県 ナシ族の四角枠長直轆犁

### 4. 三角枠長直轆犁

このタイプの犁は犁床がなく、犁身・犁柱・犁轆が三角枠を構成し、犁轆は長くかつ真っ直ぐで、牛の一头引きまたは二頭引きで使われる。水田も耕作でき、旱地にも適している。主に西南・華南・中南一帯に分布する。



図4 山東省滕県 後漢墓画像石



写真4 雲南省大理剣川地区 ベー族の三角枠長直轆犁

### 5. 三角枠曲轆犁

このタイプの犁と三角枠長直轆犁との違いは、曲がった犁轆にある。曲轆の曲度は小さいものや大きく曲がったものもあって一定ではなく、三角枠の形や構造も一様ではない。そのため同じく三角枠曲轆犁と

いっても、その形態には大きな偏差がある。この犁は一般には水田犁と山地犁の区分があり、その分布はおもに中国西南と華南である。



図5 雲南省順寧府 清代耕作図

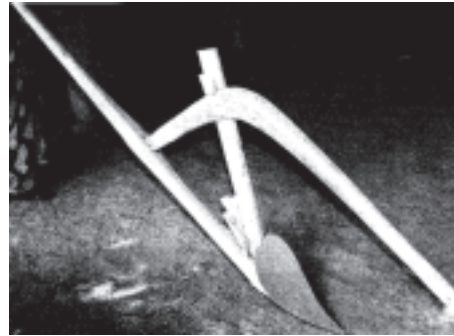


写真5 雲南省景洪市 タイ族の三角枠曲轆犁

以上、中国犁を5種の類型に整理した。第1型は「江東犁」で、我が国の歴史文献でもっとも早く詳細に記述された代表的な犁で、おもに水田稲作の歴史がもっとも古くかつ発達した長江中下流域に分布している。第2型は無犁柱長轆犁で、我が国西部の乾燥高原地帯での典型的な犁である。その構造から見れば、インドから西アジアの犁とよく似た特徴をそなえている。第3型は四角枠長直轆犁で、これまた我が国の西部地区に広く分布する歴史の古い重要な犁で、その形態は上述の2つの犁型を結合したような特徴をもっている。第4型は三角枠長直轆犁で、おもに中国西北と西南の過渡地帯に分布している。この犁型を使用している民族は、多くは西北より西南に移動した民族で、ここから類推すれば、この犁型は上述の第3型の犁が南に伝播する過程で、新しい環境に適応するなかで改良された形態と見ることができよう。第5型は三角枠曲轆犁で、おもに中国西南と華南、それに東南アジアのラオス・ベトナム・タイ・ミャンマーなどにも分布する。上述の事実からすれば、一つの犁型の形成は、その地の風土と農業形態が産み育てるものであるが、民族移動や文化の伝播もまた、各地の犁型の形成に重要な影響をもつものといえよう。

- 1 中国農業博物館農史研究室編『中国農業科技史図説』（農業出版社、1989年）、106～111頁。
- 2 「陝西省で発掘された漢代の鉄製犁先と犁へら」（『文物』1966年第1期）、23頁。
- 3 陳文華論文（『農業考古』、文物出版社、2002年第1期）、83頁。
- 4 牟永抗・宋兆麟「江蘇・浙江の石犁と破土器 - 我が国の犁耕の起源についての試論」（『農業考古』1981年第2期）、75頁。
- 5 余扶危ほか「我が国の犁耕農業の起源についての試論」（『農業考古』1981年第1期）、33頁。
- 6 曹貫一『中国農業経済史』（中国社会科学出版社、1989年）、8頁。
- 7 陳文華論文（『農業考古』、文物出版社、2002年第1期）、83頁。
- 8 家永泰光『犁と農耕の文化』（古今書院、1980年）、16～18頁。
- 9 中国農業博物館農史研究室編『中国農業科技史図説』（農業出版社、1989年）、106～111頁。
- 10 王連芳先生の教示によれば、氏が1950年代に怒江の民族工作に従事しておられた折りに「猪耕」の方法を見たという。